

ラインの向こう側

～ 留置所体験記 その9 ～

茶ーリトル(ペンネーム)

前回のあらすじ

友達と服を盗み逮捕された。僕は20歳で、あとは未成年。僕だけ違う場所に連れて行かれ、留置場生活が始まった。10日間の拘留が決定……。

拘留前の夜、犯罪者だって鬼畜だって人でなしだって、心から笑いあえる。涙を流せる。悪いことしたら反省できるんだ。そんな事を、ふとんの中でぼんやり思っていたら、涙がでてきた……。

セカンドステージのメンバー

僕、ゆうじさん、連さん、にんにんさん

この日、そう、拘留がスタートしたこの日は、僕にとって大きな転機を迎える事となった。接見(面会)に母ちゃんがやってきたのだ。

起床、掃除、朝飯、運動(一服)を終え、檻のなかでボ～っとしていた。たぶん昼前ぐらいだったと思うよ。その日は、取り調べはなかったんだ。だから、ゆうじさんへの差し入れであった漫画を拝借して読ませてもらったり、ボ～っとしたりしてたんだ。確か、ゆうじさんとにんにんさんは取り調べで檻に居なかったし、連さんは爆睡してたもんで、まあ暇だった訳ですよ。それで昼飯前、ゆうじさんもにんにんさんも戻って来ていて、みんなでなんか話しながら過ごしていた時だった。

「3番、接見だ」と看守さんが僕を呼んだ。

「ん? 誰だろう?」

接見室は僕らの檻のすぐ近くにあるんだ。って言うのも僕は、一度この部屋に入ってるんだ。留置場に入って1日目、トウバン弁護士っていう弁護士さんが無条件でやってくるんだ。これは、誰にでもだ。ただ、1回きり。連絡がとりたい人1人まで、連絡をとってくれる、ってだけなんだけど、これが重要だったんだよ。

僕は、弁護士さんに「誰に連絡をとるか?」を聞かれ、即座に、「家をお願いします。」と答えた。う～ん、答えたって感じじゃなかったな。なんか、僕

のお腹にある大砲からそのセリフが発射された、って感じだったよ。

どうしてだろう? どんなに強がってみせても、いきがってみせても、体が大きくなっていても、声が変わっても、それなりのお金をもつようになって、素敵な恋人ができて、これまでもずっとそうだった。目の前が真っ暗になった時、辛くて打ちのめされそうな時に、必ず心の中で浮かび上がるフレーズ。

「やべえよ、どうしよう、母ちゃん」

(つづく……)

